

職業威信と社会階層

半順序関係としての社会階層

太郎丸 博

(光華女子大学文学部)

Occupational Prestige and Social Stratification

Social Stratification as Partial Order

TAROHMARU Hiroshi

The aim of this paper is to clarify 1) what occupational prestige is and 2) the relation between social stratification and occupational prestige. After reviewing the concept of occupational prestige, I discuss the two theories about the relation between them; the unidimensional stratification theory by Parsons and the multidimensional stratification theory by Tominaga. I find a problem in the theories and propose an alternative, partial order stratification theory.

キーワード：社会階層、職業威信、半順序、社会像、妥当性

1 問題の構成

1-1 階層”理論”の貧困？

SSM 研究が過剰に統計的な方法に傾倒することに対する批判・反省は、1975 年 SSM 調査の後からあった（今田 1985; 八木 1985）。多変量解析を中心とする統計技法の発達、複雑な変数間の関連をある強い理論的仮定¹⁾のもとで捉えることを可能にした。このような統計技法への傾倒は、データ分析の発展をもたらしたものの、理論の軽視をまねくと同時に、社会階層像を不鮮明なものにしていったとされる（今田 1985; 八木 1985）。このような SSM 研究の状況は、1985 年 SSM 調査の後さらに反省の対象となった（盛山 1988, 1997; 高坂 1991; 鹿又 1992）。ここで共通して問題とされたのは、階層”理論”の貧困である。すなわち、階層研究は、ただデータを分析すればいいというものではない。分析は、理論と結合して初めて意味をもつ。このような研究方針がどの程度実践されてきたかはともかく、このような主張に対して反論する研究者は皆無である。

それでは、階層研究が必要としている”理論”とはどのようなものなのだろうか？通常、階層研究者が念頭においている理論とは、反証可能な経験命題（のセット）のこともしれない。しかし、盛山・高坂・鹿又がその貧困を主張しているのは、反証可能な経験命題ではない。反証可能な経験命題ならば、FJH 命題やトライマンの産業化命題をはじめとして、有名な命題がいくつか存在するし、新たにたくさんのアドホックな”命題”が作られてきた。しかし、これほどたくさんの経験命題が作られながら、1995 年 SSM 調査委員

会の研究代表者によって今なお”理論”の貧困が嘆かれるという事態そのものが、SSM 研究に不足しているのは、反証可能な経験命題ではないことを示している。

したがって、SSM 研究に不足しているのは、反証可能な経験命題以外の理論的な何かである。盛山(1988)によればそれは「モデル」であり、鹿又(1992)によると「解釈的戦略」および「数理的戦略」である。これらの主張は基本的に正しいけれども、重要な論点を見落としているように思える。私は SSM 研究に欠けているのは世界像である²⁾。理論は世界像をもその重要な構成要素として持っている。ここでいう世界像とは、社会は全体としてどのような形をしているのかに関する諸前提の総体のことである。例えば、階層とは何なのか、社会移動/階層の再生産とはとはいかなる事態なのか、といった問題は世界像の問題である。階層を連続変数と捉えるべきか、離散変数と捉えるべきか、職業カテゴリーを構成するならば、どのような分類が妥当なのか、といったデータを分析する際に本質的に重要な問題も、理論、とりわけその世界像との関係で初めて正当化されるのである。Bourdieu(1979=1990)の議論が日本の実態にあわないと批判されながらも、ある種の魅力をもち続けているのは、このような世界像を Bourdieu(1979=1990)の議論が持っているからだ。経験命題は世界像と結びつけられてはじめて、全体としての社会について含意を持つことができる。そのことによって、社会理論は鮮やかな社会像を結ぶことができるのである。

世界像は、反証可能な経験命題の外側にあるため、データの分析には還元できない。理論は世界像をその中に含む以上、経験的に完全に反証されることはない。マルクス主義階級理論は、ソ連が崩壊しても倒れない。合理的選択理論も、人間がどんなに非合理的な行為をしようと放棄されない。それは、理論とは単なる反証可能な命題のセットではなく、その背後に世界像を持つものだからだ。個々の経験命題が反証されても必ずしも世界像が誤っていたことにはならない。それは、世界像から経験命題を導く際に用いた補助的公準が間違っていただけかもしれないからだ。

この世界像の経験的反証不可能性ゆえに、SSM 研究者は理論を論じることに過剰に禁欲的であった(直井 1986, 1991)。確かに、理論の優劣の比較は、しばしば単なる水掛け論に墮する危険性がある。しかし、現実との対話をやめ、データに裏切られ続け、説得力のある社会像を提示できない理論は、しだいに廃れていく。鮮やかな社会像を何らかの資料をもとにリアルに提示した理論は、批判的継承者を得て連続的/不連続的に発展していく(Runciman 1983)。このことは社会学の歴史が語るところである(Collins 1994)。理論を重視することは、単なる水掛け論や相対主義への道ではない。

むしろ理論は概念の操作化や分析手法の選択、調査の設計の際に有効な指針を与えてくれる。これらのデータ収集・分析にとって本質的な問題は、優れて理論的な問題なのである。理論を単なる経験命題に矮小化することは、階層”理論”の貧困を招くだけでなく、データ分析の貧困をも引き起こすのである。

1-2 職業威信理論の貧困?

世界像を含めて考えると、”理論”が貧困であるというのは正確な表現ではない。なぜなら階層論の伝統の中には（世界像を含めて）理論は存在してきたからだ。ただそれらが反省的に発展させられていないだけである。その中でも、もっとも重要な問題の一つであるにもかかわらず、ほとんど黙殺され続けてきたのが職業威信の理論である。どのように階層を捉えるにせよ、階層の序列を定める際に職業威信の果たしてきた役割は非常に大きい。職業威信の「測定」によってパス解析による地位達成モデルの研究も可能になったし、職業カテゴリを用いる際にもカテゴリ間の序列を正当化する根拠となっているのが職業威信であることは、疑い得ない。職業威信の重要性は Wright(1980)のような階級論寄りの研究者を除けば、多くの階層研究者が認めるところだろう。それにもかかわらず、

- 1) 職業威信とは何なのか、
- 2) 職業威信と階層の関係はどのようなものなのか、

という基本的問題は十分に議論されてきたとは言い難い。これらの問題は世界像の問題であるがゆえに軽視され続けてきた。本稿の課題は、Parsons(1940, 1951)の一元的階層論と富永(1979)の多元的階層論を批判的に検討することを通して、上の二つの問題に関して一つの理論/世界像を提示することである。パーソンズと富永をとりあげるのは、5節以降で述べるように、階層と職業威信の関係に関して全く異なる立場をとっているにも関わらず、本稿で後に批判する階層序列の”完全性”の仮定を無批判に導入している点で重要だからである。

以下では、2, 3, 4節で職業威信概念について概観し、5節でパーソンズの一元的階層論と職業威信の関係を論じ、6節では、一元的階層論を一般化した富永の多元的階層論について批判的に検討した後、7節ではこれらの階層・職業威信論に対するオルターナティブとして、半順序関係として階層を捉える理論を提唱する。

2 「威信」の意味

職業威信と一口に言っても、「威信」の意味をどのように解釈するかに関しては、大別して以下の三つの立場がある。

2-1 狭義の威信

高い威信を持つ者/役割は、名誉(honor)を享受し(Tumin 1967)、他者から敬服(deference)され(Shils 1968)、それにもとづいて社会的影響力を行使できるとされる(Benoit-Smullyan 1944)。この威信解釈は「威信」という言葉の元来の意味に最も忠実な解釈である。Benoit-Smullyan(1944), Shils(1968), Treiman(1977)は、はっきりとこのような立場をとっている。

2-2 広義の威信

第二の威信解釈は、威信を広い意味で解釈するものである。この場合「威信」は、必ずしも名誉や社会的影響力を含意しない。一般的な意味での良さ(general goodness)、ある

いは望ましき(general desirability)を指す(Goldthorpe & Hope 1972, 1974)。これは「威信」という言葉の意味を拡大して解釈している。この威信解釈は、一般に職業威信スコアと呼ばれているものを適切にとらえるために Goldthorpe & Hope(1972)によって提案されたものである。

職業威信の「測定」では、狭義の「威信」の高さを必ずしも直接尋ねているのではない。実際には「一般的な位置(general standing)」(NORC 1947)、「世間では一般に、これらの職業を高いとか低いとかいうふうに区別するようですが、...」(1975年SSM全国調査委員会事務局 1976)、「社会的地位」(Nakao and Treas 1994)といったワーディングが日本やアメリカでは用いられている⁹⁾。評定基準も威信だけでなく様々な基準が用いられていることから、このことは傍証される(直井 1979; NORC 1947)。

もともと、現在の職業威信尺度研究の原型となったアメリカの国立世論調査センター(NORC)による調査報告においては、職業威信という言葉は用いられておらず、平均評定(average rating)という言葉が用いられている(NORC 1947)。これが、Hatt(1950)あたりから職業威信スコアという用語が用いられるようになったようである。

2-3 社会経済的地位の指標としての威信

第三の解釈は、威信とは、社会経済的地位を示すものであると見なすものである。Featherman and Hauser(1976)によれば、職業威信スコアの値は、「職業の社会経済的属性の"誤差を含んだ"推定値("error prone" estimates)」に過ぎない。すなわち、職業威信は、職業の経済的地位と社会的地位を総合した「客観的な」地位の推定値と解釈される。Duncan(1961)が、社会経済的地位指標(Socio-Economic Index: SEI)を構成するために、職業威信(正確には高評定者の比率)を従属変数とし、在職者の高学歴者比率および高収入者比率(以下ではそれぞれ[学歴]、[収入]と呼ぶ)を独立変数として重回帰分析にかけた結果、決定係数は、約 0.8 であった。つまり、威信は、[収入]と[学歴]でかなりの程度予測できる。しかも、地位達成モデル(Blau and Duncan 1967)で地位指標としてSEIを用いた場合、威信スコアを用いた場合よりも高いパス係数をえられることから、Featherman & Hauser(1976)は、職業威信スコアの社会移動研究における価値を否定し、SEIに取って代わられるべきものとしている。実際アメリカでは、社会的地位の指標としてはSEIの方が威信スコアよりもよく用いられている。

しかし、威信を[収入]と[学歴]で説明できるからといって、威信を[収入]と[学歴]の線形結合と同一視してよいということにはならない。また、そもそも社会経済的地位とは、いったいどのような概念なのか全く不明確である。社会経済的地位の概念は、操作的なレベルでは明瞭だが、理論的なレベルでは、非常に曖昧なのである(Hodge 1981)。

以上の三つの解釈のうち、どれが"正しい解釈"かという議論は不毛である。狭義の威信概念を採用して研究することも、職業威信を社会経済的地位の指標と解釈することも原理的には可能である。しかし、後に見るパーソンズと富永の議論に最も適合的なのは広義の威信概念である(それゆえこの解釈はSSM調査において用いられているワーディングに

も適合的である)。パーソンズにおいては、かなり一般的なレベルで威信を定義しているために広義の威信解釈に適合的であるし、富永も基本的にはパーソンズの威信概念と踏襲しているのである。

3 職業威信とは"何の"威信のことか？

3-1 個人の威信か、職業の威信か

職業威信とは当然、「職業」の威信のことだ。いいかえるならば、職業威信とは、個々の在職者の威信を表しているのではなく、職業そのものの威信を表しているのである。職業威信スコアが個人の地位指標として用いられるため、この二つは混同されがちだけれども、理論的には、職業の威信とその職業の在職者個々人の威信は別のものである(Tumin 1967)。個人を中心にして考えた場合、個人は職業のほかにも様々な属性(例えば、性別・年齢・家柄・資産)を持っている。これらの様々な属性が、彼/彼女個人の威信に影響を及ぼすかもしれない(Bose and Rossi 1983; 藤田・宮島・秋永・橋本・志水 1987; 橋本 1990; Spitze and Shaffer-King 1985; Collins 1975)。仮に職業が最も強く個人の威信を規定するとしても、個人の威信を彼/彼女のついている職業の威信と同一視することは出来ない。女性の社会的地位をめぐる議論を思い起こさされたい(盛山和夫 1994)。

3-2 類型的知識としての職業分類

それでは職業威信研究における「職業」とはどのようなものだろうか。個々の職業を評定する際、われわれは個々の職業に関する類型的知識にもとづいて評定を行う(Schutz 1970=1980)。例えば「音楽家」を評定する場合を考えてみよう。実際には、神社で雅楽を演奏する音楽家もいれば、場末の酒場でピアノを弾く音楽家もいる⁹⁾。このように実際の音楽家という職業は、非常に多様である。しかし、評定者が「音楽家」の威信を評定する際に、これらの様々な音楽家という職業を具体的に勘案したうえで評定しているとは限らない。評定者はこれまでの経験から蓄積した「音楽家」という類型に付随する威信を評定するのである⁹⁾。

村瀬(1997)でも論じられているように、我々が職業を類型化する場合、必ずしも在職者が「直接に...従事している仕事(作業)の内容」すなわち「狭義の職業」(安田・原 1982: 91)によって職業を類型化しているとは限らない。同じ営業担当社員でも、大企業の営業担当社員と中小企業の営業担当社員では、別々に類型化され、異なった評定を受けるかもしれない。人々がどのように職業を類型化しているかは、職業威信の研究にとっては本質的な問題なのである(Coxon and Jones 1978; Coxon, Davis et al. 1986)。

このように、職業威信とは、個人ではなく、職業の、そして、個別の具体的な職業ではなく、類型化された職業の威信のことなのである。それでは、このような職業威信と個人の人々の持つ職業評定はどのような関係にあるのだろうか。

4 社会構造としての職業威信

4-1 単なる評定のよせ集まりか、社会構造の特性か

職業威信そのものを直接「測定」することは、一般には困難である。普通は、社会成員の職業評定をもとに、職業の持つ威信は推測される。このような職業威信と個々人の持つ職業評定の関係を考える際に、二つの見方がある。すなわち、職業威信とは、個々人のばらばらな職業評定の単なる集計でしかないと見るか、それとも、諸個人とは分析的に区別された社会構造の特性と見るか、の二つである (Wegener 1992)。前者の見方の場合、職業威信スコアは研究者が勝手に作りだしたスコアであって、それに対応するような社会階層の構造が存在するかどうかは問わない。言い換えれば、職業威信とは職業威信スコアのことであると見ているに過ぎない。後者の見方の場合、職業威信スコアは、研究者が諸個人の職業評定から計算するものだけでも、それは社会階層の構造 (のある側面) を表しているとする。この場合、職業威信と職業威信スコアは必ずしも同義ではない。

職業威信研究は社会階層論の一種である以上、とうぜん後者の見方を採用する。パーソンズと富永もそうだ。SSM 威信票も、社会構造としての職業威信を「測定」するために作られたものである (はずだ) し、実際にそのような解釈に親和的なワーディングが採用されている。前者のような見方をするならば、もっと違ったワーディングをすべきだ。例えば「生まれ変わったらついでみたい職業は？」とか「娘／息子をつかせたい職業は？」といった聞き方をしたほうがよい。岡本・原(1979)はこの種の研究にあたる。

4-2 職業威信スコアの妥当性

職業威信を社会構造の特性と見る場合、職業威信スコア (ないしはその他の職業威信尺度) が本当に職業威信を「測定」をしているのかどうかの問題になる。すなわち、「測定」の妥当性の問題である。職業威信スコアの妥当性を主張するためには、個々人の職業評定の単なる平均値が、どうして社会構造の特性である職業威信を表しているのか説明できなければならない。そのためには諸個人の職業評定と社会構造の特性である職業威信がどのような関係にあるのかを理論的に特定することが必要になる。社会構造そのものは、直接観察できない以上、諸個人の職業評定と職業威信の関係は、データによって論証できるような問題ではない。世界像の問題なのである。

このような職業評定と職業威信の関係については、様々な理論が考えられる。例えば、Parsons(1940: 843) によれば、職業評定は職業に対する諸個人の道徳的評価である。この道徳的評価は、共通の価値によって社会的に統合されている。この共通の価値による序列のシステムこそがパーソンズにとっての職業威信である (と同時に社会階層でもある) (石川 1965; 下田 1964)。そのため、多少の「逸脱」(パーソンズの社会システム理論においては、評定の食い違いも犯罪や病気と同様りっぱな逸脱である) はあるものの、職業評定は諸個人の間でほぼ一致するはずである。逸脱が真の職業威信を中心として左右対称に分布 (たとえば正規分布) するならば、諸個人の評定の平均値は職業威信を表していると考えられる。富永(1979)も直井(1979)もおそらくパーソンズに準ずる世界像を持ってい

ると推測されるが、この点について彼らは、全く何も述べていない。

また、都築(1997b)も「職業評価尺度は人々の間で共有されており、社会的な存在としてある」と仮定したうえで、評定の誤差が生じるメカニズムを数理モデルで特定し、その結果予想される誤差の生じ方を検討している。あるいは、太郎丸(1998b)のように職業威信の序列を生活世界の特性と見なすような立場もありうる。社会成員たちに自明視され、彼らの間のコミュニケーションの背景となるのが生活世界であるから、仮に職業威信の序列が生活世界の中に存在しているならば、やはり評定はほぼ一致するはずである。太郎丸(1998b)の場合、職業威信を(半・弱)順序尺度と見なして検討しているので、評定の平均値はあまり問題にならないけれども、人々がほぼ一致した順序で職業を序列づけているならば、それが生活世界の中での職業威信の序列であると見なせる。

以上のように、職業威信とは、1) 類型化された「職業」の、2) 広い意味での威信であり、3) 社会構造の特性であると同時に、4) 諸個人の職業評定と何らかの対応関係を持つ。次節以降は、職業威信が社会階層とどのような関係にあるのか見ていくことにしよう。

5 パーソンズの一元的社会階層論と職業威信

Parsons (1951=1974: 32, 45) によれば、役割は社会システムの基本的な単位である。役割は社会システムの中に特定の位置を有している。この位置を地位(status)と呼ぶ(Parsons 1951=1974: 32, 45)。地位の構成要素の一つとして、威信が考えられる。威信とは、尊重報酬の階層的序列(hierarchical ordering) のことである(Parsons 1951=1974: 139)。報酬とは、パーソンズの用語法では、「表出的意義を有する所有物」(Parsons 1951=1974: 88)をさし、報酬の対象は「つねに、即時的な欲求充足の客体である」(op.cit)。報酬のうち感情中立的で、無限定的なものをとくに尊重報酬と呼ぶ(Parsons 1951=1974: 139)。威信にしたがって関係的報酬体系のすべての要素は序列付けられる。これが社会階層と呼ばれる(Parsons 1951=1974: 140)。つまりパーソンズにとって階層と威信は形式的には同義ではないけれども、階層は威信の序列にしたがって構成される以上、実質的には威信=階層なのである。

職業も役割の一種である。個々の職業は、社会システムの中に特定の位置を有している。それがその職業の地位である。そしてこの職業の地位を規定しているのが、職業威信なのである。これをパーソナリティの側から見れば、特定の職業に就いている個人は、社会システムの中に職業的地位とそれに伴う職業威信を持っていることになる。

役割は職業だけではない以上、職業威信=社会階層というわけにはいかない。女/男、障害者/健全者、年齢という具合に複数の階層(=威信の序列)が存在することになる(Collins 1975)。それにもかかわらず、パーソンズにとってもっとも重要だったのは、職業である⁷⁾(Parsons 1940: 852)。なぜなら、職業は近代社会の主要な価値である普遍主義的業績主義に従う役割だからである(Parsons 1940: 852)。

パーソンズの一元的階層論をフォーマライズしておこう。パーソンズの一元的階層論に

においては、任意の職業 r に、その威信を表す自然数 v を割り振ってやれば、階層の序列は表せる。すなわち、一元的階層システムは、

$$v = f(r)$$

で表せる。

ここで、この世界像が、階層に関してもつ三つの仮定を指摘しておこう (Fararo 1970)。職業 x のほうが職業 y よりも上か、あるいは同じ高さに位置する場合、 xPy と表すことにする。この職業の上下関係を表す関係 P は、弱順序と呼ばれる関係の一種である。一般には任意の職業 x, y, z に関して次のような性質を持つと考えられている。

反射性：必ず xPx 。

推移性： xPy かつ yPz ならば、 xPz 。

完全性：必ず、 xPy または yPx が成り立つ。

パーソンズは(そして富永も)これらの前提を暗黙のうちに仮定している。自然数を割り振れるということは、この弱順序の仮定をおいているということである。このこと (とりわけ完全性の仮定)が、後に多元的階層論において問題となる。

以上のように、パーソンズにとっての社会階層とは、第一義的には、職業威信のことであったといえる。しかし、このような社会階層論は、今さまざまな批判を受けている。第一に、性別、年齢、障害の有無、人種、といった要因を積極的に位置づけていないという批判が存在する。職業という役割だけしか担っていない個人など存在しない。実際にはさまざまな役割のセットとその担い手が存在するのであり、職業とその他の役割の関係をとらえるための枠組みが必要とされている。しかし、これはパーソンズの階層論にとって本質的な難点ではない。個々の役割の威信ではなく、役割セットの威信によって階層を定義すれば、この難点はクリアーできる。実際にこれを調べるのはもちろん困難な仕事けれども、職業威信に対する在職者の性別の影響の研究はこのような試みの一例である。

問題は第二の批判である。すなわち、威信だけで本当に役割の序列をさだめていいのかという批判である。威信だけでなく、役割に付随する収入や資産、勢力などの社会的資源も階層の構成要素となっているのではないかという問題である。このように、威信だけではなく、その他の資源も階層の構成要素として積極的にかつ明確に位置づけたのが富永 (1979)である⁹⁾。

6 富永の多元的社会階層論と職業威信

富永(1979: 3)によれば、社会階層とは社会的資源の不平等な配分状態のことである。彼は社会的資源として職業 (威信)、教育、所得、財産、生活様式、勢力の六つを挙げている。社会階層とはこれらの複数の要因によって決定される多元的な現象である。この場合、職業威信は階層を構成する重要な要素だけれども、階層が職業威信に還元されることはな

い。このような富永の多元的階層論は、パーソンズの一元論を一般化したものと位置づけられる。これによって職業威信だけでなく階層のさまざまな側面をとらえることが可能になった。この階層概念は日本の階層研究者の間で標準的な階層定義として定着している。

このような多元的階層論は、高い一般性を獲得したものの、階層理論としては、一つの難点を抱えることになる。多元的階層論においては、社会的地位は、多元空間上の点としてしか表せない。そのため、職業階層や教育階層のような個々の次元の階層について論じることができても、社会全体がどのような意味で、階層をなしているのかについては、明確な世界像を持っていない。多元空間上の点の配置は、階層というには程遠いのである。したがって、我々が通常階層という言葉からイメージするような意味での階層を多元的階層論はうまく扱えない。もしも、すべての次元の序列がほぼ同じならば（すなわち地位の一貫性が非常に高ければ）、多元的階層論も、社会全体の階層序列について論じることができる。しかし、これは、事実上階層が一次元であることを示す。すべての次元の序列が同じならば、職業威信のような単一の次元で階層をとらえても実質的には差し障りないことになる。多元的階層論が必要とされたのは、各次元における序列がある程度異なっているという認識があったからだ（富永 1979: 20）。

以上の議論を一般的に論じてみよう。任意の社会成員 i に対して（富永は個人に地位を割り振ることを論じている）、その多元的地位 (v_1, v_2, \dots, v_n) を割り振ってやればよい $(v_1, v_2, \dots, v_n$ はすべて自然数とする)。したがって多元的階層システムは、

$$(v_1, v_2, \dots, v_n) = g(i)$$

と表せる。ところで、この多元的地位を一つの階層に変換するためには、多元的地位は、自然数 v に対応づけられなければならない。すなわち

$$v = h((v_1, v_2, \dots, v_n))$$

である。

この多元的地位を階層に変換するための関数 h が満たすべき制約が三つある。

地位の非一貫性の制約: (v_1, v_2, \dots, v_n) は任意の値をとりうるとする。

単調増加の制約: 任意の v_1 と v は単調増加の関係にある。

各次元間の比較不可能性の制約: 多元的地位の構成要素の大きさは比較できない。

1番目の制約は、非一貫的な地位の存在を許容するためにおいている。単調増加の制約も、個々の次元における地位が高まれば、全体としての階層上の地位も高まることを仮定しているに過ぎない。3番目の比較不可能性の制約は、階層の各次元を統合するような理論が存在しないことから来ている⁹⁾。もしも比較可能ならば、たとえば教育年数が16年であるということと中小企業の課長であるということの社会的地位の高さへの効果の大きさを比較できるということだ。しかしこのような比較には根拠がない。

この三つの制約のもとでは、例えば、教育年数は高いが職業威信は低い人の地位と、教育年数は低いが職業威信の高い人の地位の間で、その地位の序列を決めるのが困難なのだ。

上のような制約を満たし、なおかつ有意な関数 h を見つけるのは困難なように思える。

このような難点がはっきりと露呈するのは、地位達成モデルにおいてである。富永は理論編では、多元的階層論をはっきりと提唱しながら、地位達成モデルにおいては、階層を職業威信一次元に縮小してしまう。階層は多元的であるといいながら、社会移動論においては、階層は一元的なものになってしまう。もちろんこれは、地位達成モデルで用いられるパス解析においては、社会的地位は、スカラー、すなわち一元的でなければならないという方法論上の要請からも来ている。しかし、多元的階層構造の中では、個人が社会階層を上昇したとか下降したということの意味が理論的に不明瞭なのである。そのため、社会移動を論じるためには、階層は一つの要素に還元されなければならないのだ。

階層とは、その言葉の意味からして、一つの序列のシステムとして考えざるを得ないように思える。しかし、多元的階層概念はあまりにも一般的過ぎるため、一つの序列のシステムを表すのが困難なのである。

これに対して SEI のような総合的地位指標を作ったり、確証因子分析によって社会的地位という単一の潜在概念を作ること考えられるだろう。しかし、このような試みは、理論的にも方法論的にも破綻している。SEI は学歴と収入を適当に重みづけして足し合わす、広い意味でのリッカート尺度だ。しかし、この重みを決定できる基準が存在しない。そもそも、比較不可能性の制約に反する。リッカート法は社会的地位尺度には、不適切な尺度構成法なのだ。確証因子分析で社会的地位を構成する場合も同様である。社会的地位は最終的には個々の地位指標の線形加法結合で表される以上、やっていることは広い意味でのリッカート尺度の構成だ。もともと、多元的階層論とは、このような一次元への還元を避けるために提唱されたはずだ。階層論が必要としているのは、階層を一次元に還元することなく、社会の中の全体的な序列の構造を明らかにすることであるように思える。

7 半順序階層論と職業威信

7-1 地位の非一貫性と Wright(1980)の階級論

前節で述べた問題を解決するための一つの方向性は、地位の非一貫性の議論と Wright(1980)の階級論にある。今田・原(1979)でも論じられているように、多元的階層をいくつかのクラスターに分割した場合、すべての次元において一貫して高い地位を持つクラスターや一貫して低い地位を持つクラスターも存在している。この場合、一貫低クラスターより非一貫クラスターの方が、そして非一貫クラスターより一貫高クラスターのほうが高い階層にあるとあって差し支えないように思える。だとすれば、多次元空間の中にも階層間に何らかの序列を構成することは可能かもしれない。

このような複数の次元間の非一貫性の問題を自己の階級論に積極的に取り込んだのが Wright(1980)の階級論である。Wright(1980)によれば、階級は資本所有の有無によって分割される。ただし、資本は3種類に分類されるため、一部の資本のみを持ち、他の種類の資本を持っていない人々も存在する。このような人々からなる階級を矛盾する階級と

Wright(1980)は呼んだ。矛盾する階級は何種類か存在する。矛盾する階級同士の間には、必ずしも序列をつけられない。しかし、矛盾する階級は、すべての資本を所有する資本家階級と、資本を一つも所有しない労働者階級の間位置することは間違いない。このように考えると、多元的であっても、その中に序列のシステムを構成することは不可能ではないことがわかる。

7-2 半順序階層

Wright(1980)の構成した階級システムは、数学的には、束(lattice)と呼ばれる半順序(partial ordering)の一種である。半順序の特徴は、完全性の仮定をおかない点である。完全性を満たす通常の順序関係においては、要素間の序列が必ず定まる。例えば、半熟練職よりは、熟練職のほうが上の階層だし、熟練職よりは事務職のほうが上、といった具合である。階層の構成要素間で必ず序列が定まるとというのが、完全性を満たす、通常の順序関係の特徴である。しかし、多元的階層のような複雑な階層構造の場合、必ずしも序列が定まるとは限らない。例えば、Wright(1980)の階級論の管理職と小ブルジョアの関係がそうである。このような多元的階層構造の中で階層の序列を構成するとすれば、完全性の仮定をおかない順序関係、すなわち半順序のシステムとして階層を構成するのが適切であるように思える。半順序概念を導入することで、多元空間上に、より一般的な意味での"階層"を構成できる。

以上の議論をフォーマルに定式化すると、任意の二つの多元的社会的地位($v_{a1}, v_{a2}, \dots, v_{an}$), ($v_{b1}, v_{b2}, \dots, v_{bn}$)の間の上下関係は以下のように表せる。

$$\text{任意の } j \text{ に関して } v_{aj} \leq v_{bj} \iff (v_{a1}, v_{a2}, \dots, v_{an}) \leq (v_{b1}, v_{b2}, \dots, v_{bn})$$

このような定義以外にも多元的地位間の上下関係の定義は考えられるだろう。例えばもう少し、上下関係が成り立つための条件を緩めることも考えられる。しかし、いずれにせよ、完全性の仮定を一度カッコにくくって、階層間に上下関係が成り立つということがいかなる事態なのかを明らかにしていくことは階層理論の重要な課題であり、ここで行った定式化はそのための一歩なのである。

このような半順序階層論において、職業威信の意義は微妙である。第一に、威信は、多元的地位の構成要素の一つと見なせる。第二に、職業威信そのものが、このような社会的地位の多元性と完全性の不在を反映している可能性がある。都築(1997b)が述べるように、社会成員の職業評定が、実際の社会構造上の序列を反映(正確には誤差を含んだ正の一次変換)しているとすれば、どのような形で反映しているのかが、理論的には重要な問題になる。実際に評定基準の多元性(都築 1997a)や、威信そのものの多元性(太郎丸 1998a, b)に関する議論との接合が必要となるだろう。

注

1) クラスタ分析や多次元尺度構成法、それから林の数量化理論のような例外を除けば、社会学

-
- 者が好んで用いた多変量解析は、重回帰分析・分散分析および、因子分析であり、いずれも線形加法モデルという強い理論的仮定のもとに初めて成り立つ。
- 2) この世界像に関する議論は基本的に厚東(1991)に負っている。ただし厚東(1991)は「世界」「全体としての「社会」」という用語は使っていない。世界像という用語は使っていない。
 - 3) もちろん、尊敬(respect)を受ける度合いや、威信の高さを直接尋ねるような場合もある (Treiman 1977, Tsai and Chiu 1991)。
 - 4) 正確には、「神社で雅楽を演奏するよう期待される音楽家という職業もあれば、場末の酒場でピアノを弾くことが期待される音楽家という職業もある。」というべきだろう。問題になっているのは、あくまで在職者ではなく、職業そのものである。
 - 5) SSM 職業分類では、場末の酒場のピアニストも「音楽家」に分類される(1995年 SSM 調査研究会 1995)。しかし評定者が、場末の酒場のピアニストも「音楽家」の中に含まれると認識しているかどうかははっきりしない。
 - 6) したがって、職業分類は、職業威信の「測定」にとって本質的に重要である。人々が共有する職業類型とは異なる職業分類を採用した場合、「測定」の妥当性は下がることになる。
 - 7) 正確には性別役割分業および家族制度と結びつくことで職業階層は成立する。
 - 8) Sorokin(1959)や Tumin(1967) も多元的階層論者だけれども、本稿では富永(1979)を代表的論者と見なした。その理由は、彼が階層の多元性を積極的に前面に押し出しているからである。
 - 9) 逆に言えば、Fararo(1970) のように lexicographical な関係が各次元の間に成り立つとする世界像を構成できるならば、各次元間の比較不可能性の制約ははずしてもよい。

文献

- 1975年 SSM 全国調査委員会事務局. 1976. 『1975年 SSM 調査基礎集計表』1975年 SSM 全国調査委員会.
- 1995年 SSM 調査研究会. 1995. 『SSM 産業分類・職業分類』.
- Benoit-Smullyan, E. 1944. "Status, Status Types, and Status Interrelations." *American Sociological Review* 9: 151-161.
- Blau, P. M. and O. D. Duncan 1967. *American Occupational Structure*. The Free Press.
- Bose, C. E. and P. H. Rossi. 1983. "Gender and Jobs: Prestige Standings of Occupations as Affected by Gender." *American Sociological Review* 48(June): 316-330.
- Bourdieu, P. 1979. *La distinction: Critique sociale du jugement*. Minuit. 石井洋二郎 (訳) 1990. 『ディスタクシオン I, II』藤原書店.
- Collins, R. 1975. *Conflict Sociology; Toward an explanatory science*. Academic Press.
- Collins, R. 1994. *Four Sociological Traditions*. New York, Oxford University Press.
- Coxon, A. P. M. and C. L. Jones 1978. *The Images of Occupational Prestige*. London, The Macmillan Press.
- Coxon, A. P. M., P. M. Davis, et al. 1986. *Images of Social Stratification: Occupational Structures and Class*. London, Sage Publications.
- Duncan, O. D. 1961. "A Socioeconomic Index for All Occupations." In A. J. Reiss and P. K.

- Hatt (Ed.), *Occupations and Social Status*, New York: Free Press, 109-138.
- Fararo, T. J. 1970. "Theoretical Studies in Status and Stratification." *General Systems* 15: 71-101.
- Featherman, D. L. and R. M. Hauser. 1976. "Prestige or Socioeconomic Scales in the Study of Occupational Achievement." *Sociological Methods and Research* 4: 402-422.
- 藤田英典・宮島喬・秋永雄一・橋本健二・志水宏吉. 1987. 「文化の階層性と文化的再生産」『東京大学教育学部紀要』 27: 51-89.
- Goldthorpe, J. H. and K. Hope. 1972. "Occupational Grading and Occupational Prestige." In K. Hope (Ed.), *The Analysis of Social Mobility: Methods and Approaches*, Oxford: Oxford University Press, 23-79.
- Goldthorpe, J. H. and K. Hope 1974. *The Social Grading of Occupations*. Clarendon Press.
- 橋本健二. 1990. 「文化評価の構造と文化の階層性」『静岡大学教養部研究報告人文社会科学編』 24(2): 151-166.
- Hatt, P. K. 1950. "Occupation and Social Status." *American Journal of Sociology* 55: 533-543.
- Hodge, R. W. 1981. "The Measurement of Occupational Status." *Social Science Research* 10: 396-415.
- 今田高俊. 1985. 「岐路に立つ社会階層状況」『現代社会学』 11(2): 164-174.
- 今田高俊・原純輔. 1979. 「社会的地位の一貫性と非一貫性」富永健一(編)『日本の階層構造』東京大学出版会. pp.161-197.
- 石川義之. 1965. 「社会構造と社会成層 —T. パーソンズを中心として」『社会学評論』 16(1): 18-85.
- 鹿又伸夫. 1992. 「階層・移動研究の袋小路と活路」『理論と方法』 7(1): 1-18.
- 高坂賢次. 1991. 「1985年のSSM調査と日本の階層構造研究」『ソシオロジ』 35(3): 130-135.
- 厚東洋輔. 1991. 『社会認識と想像力』ハーベスト社.
- 村瀬洋一. 1997. 「職業威信スコアの問題点と新スコアの提案 —従業員規模が職業評価に及ぼす影響を中心に—」1995年SSM職業威信班研究会(於大阪). 1997/Oct./18.
- Nakao, K. and J. Treas. 1994. "Updating Occupational Prestige and Socioeconomic Scores: How the new measures measure up." *Sociological Methodology* 24: 1-72.
- 直井優. 1979. 「職業的地位尺度の構成」富永健一(編)『日本の階層構造』東京大学出版会. pp.434-472.
- 直井優. 1986. 「概説 日本の社会学 社会階層・社会移動」直井優・原純輔・小林甫(編)『リーディングス日本の社会学 8 社会階層・社会移動』東京大学出版会. pp.3-13.
- 直井優. 1991. 「多元化するSSM調査研究」『社会学評論』 42(1): 57-62.
- NORC. 1947. "Jobs and Occupations: A popular evaluation." *Opinion News* 11: 3-13.
- 岡本英雄・原純輔. 1979. 「職業の魅力評価の分析」富永健一(編)『日本の階層構造』東京大学出版会. pp.421-433.
- Parsons, T. 1940. "An Analytical Approach to the Theory of Social Stratification." *American*

Journal of Sociology 45: 841-862.

- Parsons, T. 1951. *Social System*. Free Press. 佐藤勉 (訳) 1974. 『社会体系論』 青木書店.
- Runciman, W. G. 1983. *A Treatise on Social Theory; Vol.1. The Methodology of Social Theory*. Cambridge, 河上源太郎 (訳) 1991. 『社会理論の方法』 木鐸社.
- Shils, E. 1968. "Deference." In J. A. Jackson (Ed.), *Social Stratification*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schutz, A. 1970. *On Phenomenology and Social Relations*. Illinois, University of Chicago Press. 森川真規雄・浜日出夫 (訳) 1980. 『現象学的社会学』 紀伊国屋書店.
- 盛山和夫. 1988. 「序文」1985年社会階層と社会移動全国調査報告書 第1巻: 社会階層の構造と過程』1985年社会階層と社会移動全国調査委員会. pp.1-8.
- 盛山和夫. 1994. 「階層研究における「女性問題」」『理論と方法』 9(2): 111-126.
- 盛山和夫. 1997. 「階層研究と計量社会学」『行動計量学』 24(1): 1-10.
- 下田直春. 1964. 「社会成層論の経験的分析図式としての諸問題 —機能主義的社会成層論批判を中心に」『社会学評論』 14(4): 27-46.
- Sorokin, P. A. 1959. *Social and Cultural Mobility*. Free Press.
- Spitze, G. and E. Shaffer-King. 1985. "Job or No Job: Sex and Scaling." *Research in Social Stratification and Mobility* 4: 219-236.
- 太郎丸博. 1998a. 「職業評定値および職業威信スコアの基本的特性」本報告書所収.
- 太郎丸博. 1998b. 「職業評定の一致度と間主観的階層構造」本報告書所収.
- 富永健一. 1979. 「社会階層と社会変動へのアプローチ」富永健一 (編) 『日本の階層構造』 東京大学出版会. pp.3-29.
- Treiman, D. R. 1977. *Occupational Prestige in Comparative Perspective*. Academic Press.
- Tsai, S.-L. and H.-Y. Chiu. 1991. "Constructing Occupational Scales for Taiwan." *Research in Social Stratification and Mobility* 10: 229-253.
- 都築一治. 1997a. 「職業評価の構造と職業威信スコア」『日本行動計量学会第25回大会発表論文抄録集』 : 52-53.
- 都築一治. 1997b. 「職業威信構成手続きの意味」『第24回数理社会学学会大会研究報告要旨集』 : 24-25.
- Tumin, M. M. 1967. *Social Stratification; the forms and functions of inequality*. Englewood Cliffs, Prentice-Hall.
- Wegener, B. 1992. "Concepts and Measurement of Prestige." *Annual Review of Sociology* 18: 253-280.
- Wright, E. O. 1980. "Varieties of Marxist Conceptions of Class Structure." *Politics and Society* 13: 328-333
- 八木正. 1985. 「不鮮明な計量社会学的階層論」『現代社会学』 11(2):
- 安田三郎・原純輔. 1982. 『社会調査ハンドブック[第3版]』 有斐閣.